子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1996年11月1日発行　[隔月発行]

文化高知

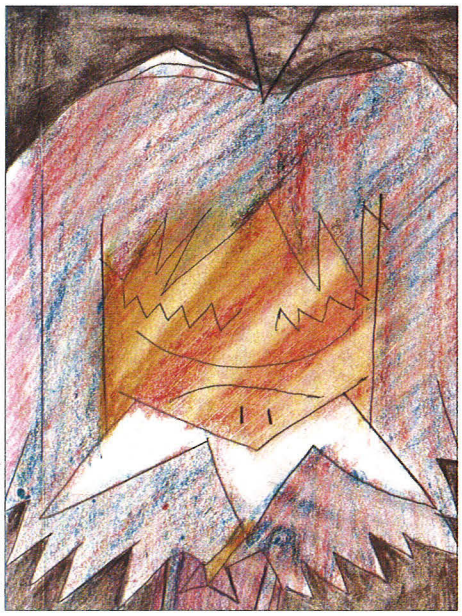
'96年11月 NO.74

「野茂英雄」

「葉月里緒菜」

「和久井映見」

玉造ヨシロー



「宝生　舞」

(財) 高知市文化振興事業団

高知の隠れ文化『絵金』

小山　高史

高知に赴任して間もない七月、赤岡町の絵金祭りに誘われて絵金を見た。この目で見る絵金の色鮮やかさ、構図の大胆さに心を奪われた。事前に友人からおどろおどろしいということばかりを吹き込まれ、単に恐いもの見たさで出かけた自分の不勉強さに恥ずかしさを感じた次第である。

描かれてから百三十余年を経ており、しかも湿気の多い高知県で必ずしも保管環境が良好とはいえなかったにもかかわらず、絵金の芝居絵は鮮やかさを失っていない。緑と赤と黒の鮮やかさが目を惹くが、これを引き立たせている中間色の配合も見事である。絵師金蔵は自らの念を絵の具自体にも込めたのだろうか。

屏風の面を存分に使った大胆な構図が芝居絵としての臨場感を高めている。また、登場人物の一人一人の仕草に特徴があり、死に人ですら息絶える直前の動きが想像できる。こうした絵金の構図と躍動感は、「二月堂良弁杉の由来」という、鷲が幼児をさらって空に飛立ち両親が追いすがる絵に、最もよく表されている。この絵では、脇役である農民と牛の動きにも彼らの驚きと助太刀がかなわぬという気持ちが描き出されており、主題を際立たせている。一度見れば忘れられない大胆かつ動きのある構図の絵である。

絵金の面白さは、こうした色合いや構図にとどまらない。芝居絵の台本となった物語を確認するところにもあろう。物語が頭に入れば、それだけ絵金が描こうとしたものを理解でき、絵の中に入り込んで行くような気持ちになる。

ところで、絵金の屏風絵や白描を見ていくうちに、なぜ自分が今までこの絵金という芸術の存在を知らなかったのかという疑問が頭から離れなくなった。絵金という言葉ですら私が聞き知ったのは、高知に着任してからである。私一人が例外とは思えない。こうした素晴らしい文化を県外の人々が知らず、味わえないのは大きな損失である。また、高知県にとっても誇るべき文化資源、観光資源を眠らせているということにほかならない。

絵金を見ていてフランスはアルザスの片田舎で見た修道院の宗教画を思い起こした。それは、首都から遠く離れた小さな町にあって人間の宿業を主題とした物語り絵という点で、絵金と多くの共通項があるからである。絵画としての水準は、私の主観で言えば、絵金の方が上だと思うが、世界的な知名度には天と地の差があり、世界中からこの宗教画を見るために人々がやってくる。一方の高知の絵金はほとんど知られていない。

高知に生まれた絵師金蔵の作品を味わい彼の生涯の足跡を辿るとき、胸躍るのは私だけであろうか。高知の住民となった今、土佐の文化を広く県外・海外の人々にも分かち合ってもらいたいと希望する。そのためには、外の人々にも知らしめる工夫と努力が必要になる。高知着任後すぐに県立美術館や民間のギャラリーを歩いたが、そこには絵金の姿はなかった。まず第一歩として、絵金を常時見れるような態勢を作ることが必要だと思う。高知に来た観光客や赴任者に限らず、高知県民ですら、絵金祭りという時期を除けば、絵金に直接出会う機会はないに等しい。赤岡町であれ県立美術館であれ場所は問わないが、是非そうした常設展を開いて欲しいと願う。また、常設展のほかにも、各地に作品を出展する、観光の書籍に載せてもらうなどの工夫も大切だと思われる。

高知では絵金に限らず一般にその文化、アイデアを県内外の人に理解してもらおうという態勢、広報がなお不足しているように思えてならない。一部の人々は大変な努力をしているが、それだけでは不十分であり、県民全体で支えていくことが必要であろう。私のような県外からの赴任者でも何かの役に立つならば、どんどん使っていただきたい。また、文化を磨いて広げていくという夢がもっとあってよい。絵師金蔵の生涯や絵金の場面を、絵金屏風の前で土佐琵琶の名人が吟唱するといった夢を私は描いてみたがどうであろうか。

（日本銀行高知支店長）

バッカスの宿る国

福留　奈美

高知出身というとまず「大酒飲みだろう」といわれてしまう。土佐に馴染みのある人なら「はちきん」という言葉もでてくるが、まずは「酒、酒、酒」である。東京にでてから早や十年余りたつが、高知の印象がここまで一つの言葉に集約されるとは、なんだか不思議なような、酒好きの私にとっては嬉しいような気持ちになる。

お酒も好きだが元来食べることが唯一の趣味というほど好きで、大学の専攻も、就職先も、自然に飲食に関わるものとなった。今でこそコーディネーターといった肩書きを持つ人が巷にあふれてきたが、自分がこの業界で修行を始めたころにはまだ珍しく、今でもなかなか説明しづらい仕事だと思う。簡単にいえば「人や技や情報を上手にその場に集わせて、単独では生まれ得ない豊かな文化を創造する」というような仕事だろうか。

たとえば、有名なフランス料理のシェフ三人にお願いして、初鰹を素材にオリジナリティ溢れる料理を二品創作していただくとする。一品は土佐の銘酒に、一品はフランスワインに合わせるように。そしてフランス人でも土佐人でも喰い道楽の達人に、味わった感想を普遍的な食文化論にまで高めていただければ有り難い。土佐の風土とシェフ、鰹料理とワインといった出会いが、新しい風として雑誌やテレビに紹介され、面白いから来月は秋田のはたはたで同じ企画をやろう、なんて話に発展するかもしれない。

面白いアイデアは浮かんでも、実際誰に何を頼めばいいのか、はたして頼めばやっていただけるものなのかが問題となる。未だに自分がいなければ実現しなかったといえるような仕事は数少ないし、まだまだ修行中の身であるが、運のいいことに人との出会いに恵まれた。好きで通ったお店のシェフや、ワイン会でご一緒した著名なソムリエたちに、何度助けられたことであろうか。

基礎的な専門知識はプロと一緒に仕事をするから必須なのだが、如何せん耳学問だけではとうてい底が知れていて、どうしても経験がものをいう。年月をかけてお金をつぎ込み食べて飲んで食に溺れる。そして現場主義、職人の技と姿勢を尊敬する気持ちを失ってはいけないと思う。コーディネーターの仕事は、結局人と人のつながりが一番大切で、そういう意味では、決してマニアではなくプロフェッショナルな客、料理人やお店にとっていいお客さんになることを自分は目標にしているようなところがあるかもしれない。

ところで、明治維新においては坂本龍馬がコーディネーターの役目を見事に果たしたように思う。あの時代に、強国の薩摩と血気盛んな長州が薩長連合を結んだのも、藩の枠にとらわれず日本のために夢を語れた龍馬の人柄とそのユニークな立場が少なからず影響しているといえるだろう。何事にも好奇心旺盛で新しもの好きの性格は、時代の先を読むには好都合であるし、人間好きの周りには自然と人の輪が広がっていくものである。執着心がなく飽きやすいというマイナスイメージの性格も、だからこそいろいろな分野に次々と飛び込んでいけるコーディネーター向きの長所ともいえる。何より大きな夢を持つことが、人を引き寄せる求心力になる。一つのことに打ち込み、技を磨き、その技で人を感動させる職人ではなく、職人同士を結び付ける磁石のような存在なのだ。

土佐の人間は概して人好きで、新しもの好きで、太平洋を眺めながら育つせいか、でっかい夢を志にしているようなところがあると思う。自分にもそんなところが感じられて、東京に出たのも、学生時代にどうしても外国で暮らしたくてフランスに渡ったのも、将来は日本と世界の食文化を伝えあう橋渡し的な仕事をしたいと思っているのも、すべて土佐の血だと納得するようにしている。もうひとつ今の仕事をしていく上で大切なのは、よく食べよく飲めること。「酒の国、土佐」に生まれてよかったと感謝している。

（フード・コーディネーター）

世界にオンリーワン

〈1〉

山田裕司

皆さんは、「小石丸」という名前をどこかで聞いた事があるでしょうか。明治の中頃に世界に品質を誇っていた日本の絹の原種で、現在、皇室で飼っている蚕でもあります。そしてまた、高知県は養蚕にとって全国で一番気象条件が良い所である事を、ご存知でしたでしょうか。

現在、僕の小石丸の研究は、お蔭様で三年目を迎えていますが、そのすばらしい品質に明るい未来を感じています。近いうちに、その成果を見ていただける日が来るものと思っています。

僕は、東京から高知へ来て五年目になりますが、これまで度々「なぜ高知へ来たのですか？」との質問を受けました。自分のこれからの仕事の場所として、高知県を選んだのは二つの大きな理由からでした。まず第一に、南国の明るい光です。東京のよどんだ空気や光の中では、真の美しい物は出来るはずはないと思い、ちょうど少年時代を過ごした湘南のような、明るい光の中での仕事にずっと憧れていたからでした。今でも、朝起きて、カーテンを開けた時に飛び込んでくる光に包まれる瞬間は、最も幸せなひとときです。

そしてもう一つは、染織を始めた頃からの夢だった、日本古来の絹の復活を、最高の条件下で、いつか実現させたかったからです。その二つの夢を実現出来る可能性を、この高知県に感じ取ったからです。幸いな事に私の予感は当たり、二つの夢はほとんど同時に現実のものとなろうとしています。

「世の中で、自分にしか出来ない事をやる。それは、未だ誰もやっていない最先端の事か、あるいは、人が捨てていった過去の物か、どちらかだ！」。そう言ったのは、私の敬愛する師である柳悦孝氏です。二十五年程前家の使いで伺った時、当時高校生であった僕に言われた言葉でした。

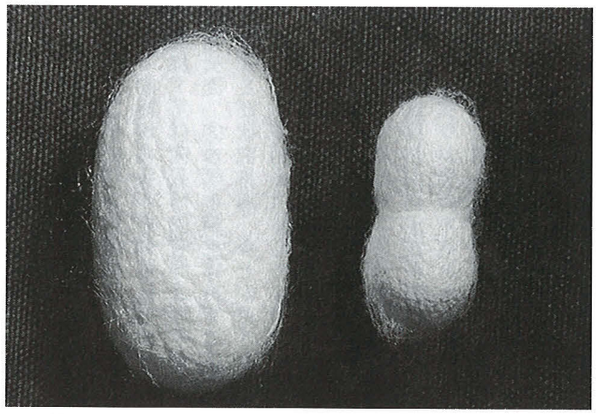
「将来僕も、世界の中で自分にしか出来ない事をやろう！」、帰りの電車の中で強く心に誓ったのを、今でも覚えています。

その柳先生と一緒に高知空港に初めて降り立ったのは、今から十二、三年前の事でした。その年の正月に、「先生、移住先に高知県がいいと思いますが、いかがでしょうか？」。そう聞いた僕に対し、やおら棚から一冊の本（地球観測衛星ランドサット・宇宙からみた日本列島）を取り出した先生は、四国の高空からの写真をしばらくのぞき込み、「なかなか良さそうじゃないか、大きな断層も無いし、一度見に行って来るといいよ」とおっしゃったので、「それでは、良さそうな所がありましたら、先生も一緒に行っていただけないでしょうか？」とすかさず言った僕の言葉に、先生はうなずいてくれました。以前から「今の東京は、人の住むような所ではない。大地震の周期にも入っているし、脱出できる人は早く地方へ行くべきだ」、そうおっしゃる先生の言葉に、移住先を捜していた僕は、一筋の光明を見た思いがしました（それまで何度となく、色々な場所を先生に相談しましたが、先生のメガネに適う所は無かったので）。そのようないきさつがあって、先生は、僕の高知行きに、同行して下さったのでした。

「小石丸」の研究に取り組む山田裕司さん

当時の飛行機は、なつかしのＹＳ―11で、羽田から二時間半の空の旅でした。生まれて初めて来た高知の印象は、とにかく田舎で、人の数が少ないのには驚きました。でも、東京近郊や他の地方で失われてしまった自然や昔の暮らしが残っているようで、とても魅力的に映りました。また、植物染料の豊富なのには目を見張りました。例えば、山桃の皮では、とても堅牢な黄色系の色が染まりますし、木や石につく地衣類（梅樹苔など）で染めた羊毛は、良い香りがして虫が付かなくなります。いずれも、東京近郊ではとても少なく、採取するのにとても苦労していました。それが高知では、いとも簡単に手に入れる事が出来るので、染色をする人間には、天国のような所だと思います。人が頭の中で思い描いていたものと現実とは違いがあるものですが、僕の場合は、実際、想像以上に高知に好印象を持ちました。また、一泊二日の旅でしたが、最初に先生と一緒に高知へこれたのは、いい想い出であると同時に新しい風土の見方を教わり、とても良い経験でした。以後、訪れる度にますます高知が好きになり、移住の決意は固まって行く一方でした。

「僕は、東京を脱出して、高知で田舎暮らしをする！」、そう東京の友人・知人に宣言した僕は、高知県に関係ある人と見ると、積極的に友だちになろうとしていました。しばらくして、県の東京事務所の方と知り合いになり、その方から、県ではちょうどカントリーライフ事業（高知の田舎売ります、貸します）というのをやっていると聞きました。それなら、これを利用しない手はないと、県庁や各市町村を頼りにしたのが、大きなまちがいでした。一般論から具体的な話になると、何ひとつ話が進まず、何回高知と東京を往復してもダメで、役人がまったくあてにならない事に気が付くのに、一年以上も無駄に時間を使ってしまいました。

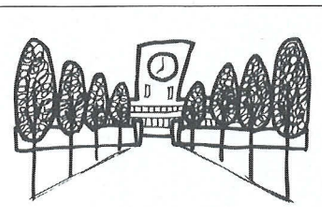


一昨年、最初の小石丸（写真右）。小石丸のまゆは、普通のものに比べると半分以下の大きさで、ピーナツ型である。

田舎へ入っていくには、まず地元の人と仲良くなる事と気づいたのは、高知の知人に、地元で一晩酒を飲んで見なさいと言われ、その通りにしたら、隣にいた人たちともすっかり仲良くなれたからでした。それならと、翌日から五日連続で飲み続けたかいがあり、めでたく空き家を貸してくれる人が見つかったのは、平成三年の暮れの頃で、ちょうど、橋本大二郎氏の初当選に、高知は沸いていました。

（染織家）

今年土佐町で飼育中の小石丸



開かれた大学の窓口として

―高知大学地域共同研究センターの設置―

越智　雅光

大学は、研究者の自由な発想により創造的な研究を展開するとともに、優れた人材を養成することを本来の使命としています。そして、その使命を果たすことにより、広く人類・社会の発展に貢献しています。

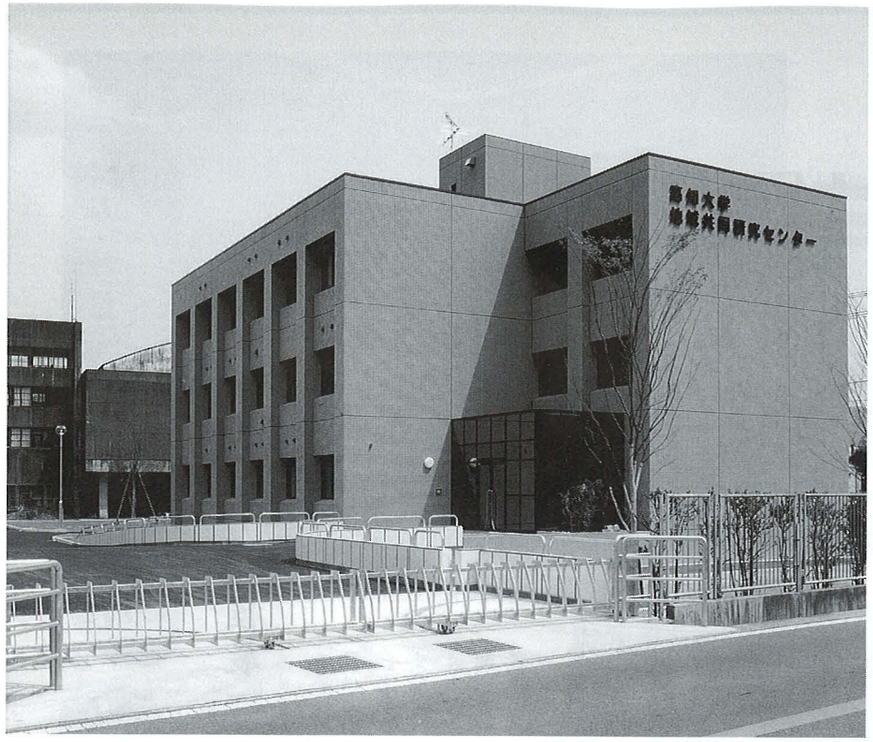
一方、近年の科学技術の急速な発展と産業構造の高度化・多様化に伴い、大学の学術研究に対して産業界など社会の各方面から具体的な諸課題の解決等のため多様な期待と要請が寄せられるようになりました。大学が教育と学術研究の本来の使命を踏まえながら、その主体性の下にこれらの要請に適切に対応し、大学の持つ研究成果の蓄積や研究能力を社会の発展のために活用することは、社会に対する貢献として重要であるばかりでなく、学外との活発な交流を通して大学本来の学術研究にも有益な刺激を受けることになり、研究活動を活性化するという観点から大学にとっても大変有意義なことと思われます。

このような趣旨から、高知大学では、地域社会・産業界に開かれた大学の窓口として、大学と民間機関等との共同研究、技術相談、情報提供など、産・官・学交流の諸活動を推進し、地域社会との連携・協力を実践する場として地域共同研究センターを平成七年四月に設置しました。また、センターの建物も今年三月に竣工し、現在本格的な活動に向けて準備を整えているところです。

地域共同研究センターの業務としましては、①民間企業等との共同研究及び受託研究　②民間企業等の技術者に対する技術教育及び研修　③民間企業等に対する学術情報の提供　④民間企業等からの科学技術相談　⑤学内及び他大学との共同研究及び連携　⑥地域に係わる学術研究調査の実施　⑦外国人研究者等との学術研究交流　⑧本学の学生に対する応用教育及び研究指導　などがあります。具体的活動としましては、出版物の刊行による情報の発信、産・官・学の交流会への参加や各種団体・企業等の訪問による情報の収集、先端技術講演会、高度技術研修、公開シンポジウム等のイベントの実施、科学・技術に関する相談の受付、民間企業等との共同研究の実施などを予定していますが、その大部分については既に活動を開始しており、実績を積み上げているところです。このような活動を通じて face to face の機会をつくり、地域社会・産業界と相互の信頼関係を深め、また県内公設試験研究機関とも連携しながら地域における科学・技術の発展と産業の振興に少しでも寄与できることを念願しています。

当センターでは、地域社会の要望に応じて幅広い分野の共同研究を行う予定ですが、当面は主として、①アメニティ社会　②情報　③環境　④新素材・材料　⑤生物資源　⑥土木・機械　などの研究に重点的に取り組むことにしています。また、近隣の他大学と連携を図りながら、他の分野の相談にも対応できる体制を整えてゆく予定です。特に、地域社会・産業界から熱い期待が寄せられている高知工科大学とは相互に補完しながら地域の発展に貢献できることを期待しています。それによって一部競合する部分が出てくることも予想されますが、このような他大学との良い意味での競争は双方の大学の活性化にも繋がるものと信じています。

本学には人文、教育、理、農の四学部のほかに海洋生物教育研究センターや遺伝子実験施設があり、幅広い分野にわたって多くの専門家が在職しています。このような人的特性を生かして、特徴のあるセンター活動を今後展開してゆく必要があると考えています。例えば、地域文化の振興、地域経済の分析、地域政策の提言等による豊かで住み良い町や村づくり、美術・工芸を生かした快適な都市空間や美しい町づくり、基礎研究と応用研究の融合領域の研究、一次産物の高付加価値化と高度利用など、他大学の共同研究センターに見られない特色のある活動が期待されます。



今年３月に竣工した地域共同研究センター棟

高知県には美しい自然がまだ沢山残っています。二十一世紀を展望した地域の発展を考えるとき、この美しい自然と調和した産業の構築が何よりも重要ではないでしょうか。さいわい、本学には高知の自然と風土に精通した多くの研究者が在籍しています。これからの新しい産業の創出のために、これらの有能な人材に活躍の場が与えられることを願っています。

とかく、「大学は敷居が高い」との批判を学外の方からよく受けますので、当センターは学外者が入るのに便利で、精神的圧迫を受けることの少ない場所を選んで建物を建てました。ＪＲ朝倉駅から南へ三〇〇ｍ程のところに国道に面して建っている瀟洒な建物がそれです。職員も、民間企業から赴任してきた専任教官を中心に初対面の人にも打ち解けた話のできる気さくな人間ばかりです。是非、お気軽にお立ち寄り下さい。

なお、当センター利用にかかわる詳細につきましては、高知大学地域共同研究センター概要、同規則集、共同研究募集案内に詳しく記載されています。これらの資料はセンターに用意してありますので、御希望の方は御遠慮なくお申し付け下さい。

（地域共同研究センター長）

賛助会員募集中!!

会　　費　　年額　2,000円

特　　典
①　機関紙「文化高知」を年６回お手元にお届けします。
②　事業団発行の出版物の10%割引（一部例外あり）
③　主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）
〔※上記特典は申し込みいただいた日から１カ年有効〕

※お申し込み　①郵便振替　②現金書留　③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

歴史展示雑感

――「明治の女性展」を担当して――

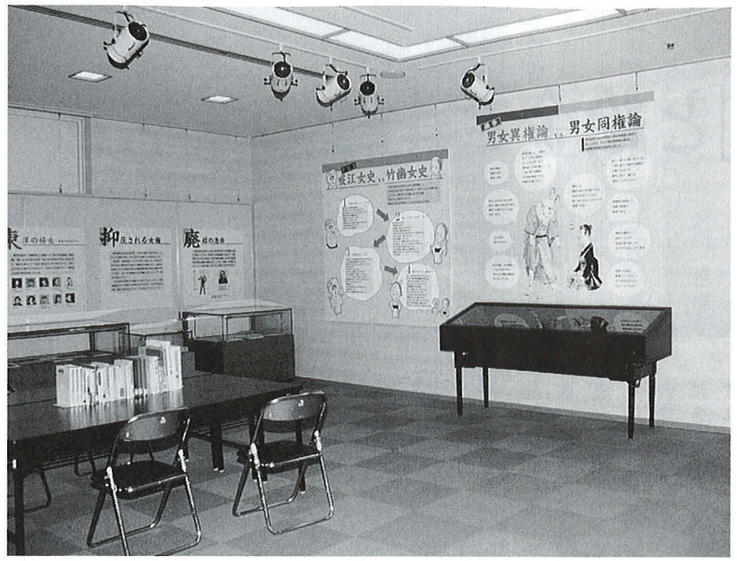
筒井秀一

私は、高知市立自由民権記念館で十月九日から十二月一日まで開催している「明治の女性展」を担当いたしました。これまで常設展示や「植木枝盛展」「聖園と北光社展」「土佐の絵馬展」「自由の足跡展」などを手掛けましたが、その経験から歴史展示について感じていることをここに述べて、読者諸賢の参考にしていただきたいと思います。

さて、一九九六年九月二十三日の朝日新聞に美術展覧会の作品解説について、観覧者の「もっと詳しくとの声がある一方、鑑賞の邪魔になるという、声も出ている」として、現場の意見を紹介した記事が掲載されています。それによると東武美術館の学芸企画課長さんは、「説明でその絵への興味がますますわく」のでより丁寧にという立場であり、一方東京国立近代美術館の課長さんは、説明は作品名、作者名、制作年にとどめるべきで「過度な説明は作品と対話して無限のドラマを読む楽しみを奪う」という見解だそうです。

このことにはそれぞれご意見があろうと思いますが、私が思ったのは歴史展示とはえらい環境がちがうものだな、ということです。最近の歴史展示は名品・遺品の陳列からストーリー性のあるものに変化して来ています。その場合解説なしの歴史展示はちょっと考えられません。それを美術展と対比してかんがえると二点にまとめられるのではないかと思います。

まず一つは美術展はおおむね鑑賞されることを前提とした「作品」が展示されているわけで、だからあえて解説をつける必要はないということにもなるでしょう。一方、歴史展示に使う資料は「作品」として制作されたものはほとんど無いといえます。したがって特に予備知識がある人以外は、見ただけでは何のことやら分からないということになるわけで、資料解説は当然のことと考えられています。また「作品」はそれ自体完結したもので、だから「無限のドラマ」を楽しむという鑑賞ができるのだと思います。もちろん歴史資料にも「無限のドラマ」が込められていますが、そのものの鑑賞だけでそれを味わうのは大変難しいことで、この点でも解説が必要でしょう。



二つ目は、美術展もさまざまなテーマで行われていますが、観覧者に伝えたいことは作品鑑賞をはなれてはあり得ないと思います。ところが歴史展示では、ある歴史像たとえば自由民権運動とはこんなものです、ということを伝えようとする展示を目指すことが往々にしてあります。それは資料を見てもらうだけではちょっと難しい。通常は資料の情報を整理し、抽象化した言葉によることとなります。そしてこれは単なる資料解説の域を越えた展示担当者の文字による見解とならざるを得ない訳です。極端に言えば実物資料とは関係ないのかも知れません。

このように美術展と歴史展示とは違うなあと思った訳ですが、歴史展示を今言ったように考えると、ややこしい問題が発生します。

それは、ケース越しにせよ実物を見る値打ちはあるにしても、特にそれが指定文化財や教科書でゴチックになっているものであればなおさらですが、言わんとすることはほとんど文字によって表現されるということです。もちろん現在の展示手法では、映像や模型からボタンを押せばピコピコピコっと情報が表現されるといったものまでありますが、これは巨額の費用を要するので常設展示の一部にしか使えない、まして二カ月程度の展示会には関係のない話です。

ということで文字になるわけですが、文字というものは本来立って移動しつつ読むものではありません。美術展でもけっこう足がじんじんするのに、文字をよまされた日にはよっぽど関心のある人以外は苦痛以外の何物でもない、のではないでしょうか。そうすると、展示図録や今日たくさん発行されているヴィジュアルな歴史書を読むほうがよっぽどまし、ということになりかねません。

実は今回の「明治の女性展」も大いにこの問題をかかえていまして、情報を伝える能力は展示図録が勝っているという感じは否めません。というわけで大いに悩みながら展示をしたわけですが、すべての人が展示図録を購入される訳ではないので、パネル表現で若干の工夫をしたという宣伝を最後にします。

写真をみていただきますと、「論争　吸江女史ＶＳ竹幽女史」「論争　男女異権論ＶＳ男女同権論」というパネルがあります。前者はなんと資料なし（やるとすれば論争の舞台となった「東雲新聞」になりますが、県外借用先が増えるので見送りました。なお竹幽女史・山崎竹の資料は別のところに展示しています）、後者のケースには関係する本が四冊並んでいます。この論争を文章で紹介するとなると、何というかチラっと見ただけで読む気のしないパネルになりそうな気がします。そこで土佐弁の話言葉にしたり、漫画風にしたわけです。これが成功したのかどうか、感想をお聞きしたいと思っています。是非ご来館ください。

（高知市立自由民権記念館学芸員）

「絵金」と絵金と土佐の芝居絵

川島　郁子

高知県立美術館は、この十一月で開館三周年をむかえることができました。その記念展として「絵金」を紹介する「絵金展―土佐の芝居絵と絵師金蔵」を開催しています。

皆様ご存知の絵金を「絵金」と括弧つきにしているのは、絵師金蔵を略称した「絵金」を土佐の芝居絵の代表的な絵師として拡大して使っているためです。

絵金が活躍する以前にも芝居絵を描いた絵師はいます。それは絵金の師である池添美雅の叔父の絵馬屋金兵衛という絵師で、芝居絵の絵馬で名声を得たと伝えられ、その通称を「画金」といったそうです。「金」の字のついた名を持つ絵師二人が芝居絵を手がけて双方とも評価され、土佐の芝居絵は全国的にも例をみない芝居絵屏風を生み出します。

この芝居絵屏風は、多くは大型の台枠にはめ込んで夏の祭礼に展示されます。この台枠は「台提灯」と呼ばれていますが、土地によっては呼称が少し違っており、土佐山田町の八王子宮のものは「手長足長絵馬台」、春野町の愛宕神社のものは「燈明台」と呼ばれて親しまれています。台提灯を使わない所では、町の通りの家の軒先に出される赤岡町のほか、神社の拝殿や社務所の中に配するところもあります。

また、祭礼に供された芝居絵には、「えんま」と呼ばれる絵馬を形どった箱型の行燈があります。この「えんま」の最も大型のものとして、伊野町の音竹天満宮に芝居絵屏風を二枚続けた大きさの幅三メートル近いものが伝えられています。

芝居絵屏風の誕生は、「絵馬台」という呼び方や「えんま」の形を見ていると、絵馬から展開されたものと想像できます。絵馬から「えんま」が作られ、それが大型化していったものが外部から光を当てる「台提灯」となるという展開は、単純すぎるでしょうか。

土佐の芝居絵は昭和初期まで描かれていたと伝えられています。しかし、現在その絵師についての文献等による資料はほとんどなく、絵師の名前と描いた芝居絵の一致を見るものは少ないのが現状です。前号でも触れましたが、高知県教育委員会が絵金保存のための現状調査で、絵金以外に名前と作品が一致して伝わっているものは、芝居絵屏風では河田小龍と野口左厳、絵馬に描かれた芝居絵では恒石徳治と吉川半蔵でした。

高知県立美術館ニュース　14

現存する芝居絵の作例から、絵金の画風に倣ったもの、その画風の影響のあるものから各々の絵師の画風が出ているものまで幅広く認められます。芝居絵屏風には、前述の河田小龍らを含めて画風の特徴から二十を超える作例が認められました。保存の状態にもよるでしょうが、絵の具の発色具合から制作された時期もかなり幅広い期間にわたっているもののようです。これらのうち、同一の絵師の筆とみられる作品が二点以上あるものが十六例ほどあり、収蔵先が各地にわたっているものがその半数近くあります。このことから県下に広く需要のあった絵師が相当数いたことが推測されます。

多様な作風の芝居絵屏風を見るとき、絵金の代表作といえる『二月堂良弁杉の由来』、『浮世柄比翼稲妻鈴ケ森』、『伊達競阿国戯場　累（土橋）』などと比べると、特に絵金の画風に倣ったものを見るとき眼差しは絵金の真贋を求めて画面を彷徨うこととなりがちです。しかし、これらの芝居絵が描かれた当時、真贋が問われたかというと、少し違うように思われます。台提灯の芝居絵屏風は必ずしも同一の絵師のものが並んでいるわけではありません。光潮社刊 or 発行の『絵金』で吉村淑甫氏は、当時野市町の深淵神社で行われていた「絵競べ」を挙げ、年占いとして祭礼の綱引きや棒たおしなどの競技と同じ性質のものであったと述べられています。こうした意味あいも含められると考えると、多くの絵師たちによって競って芝居絵屏風が描かれたことは、自然なものだったのではないでしょうか。

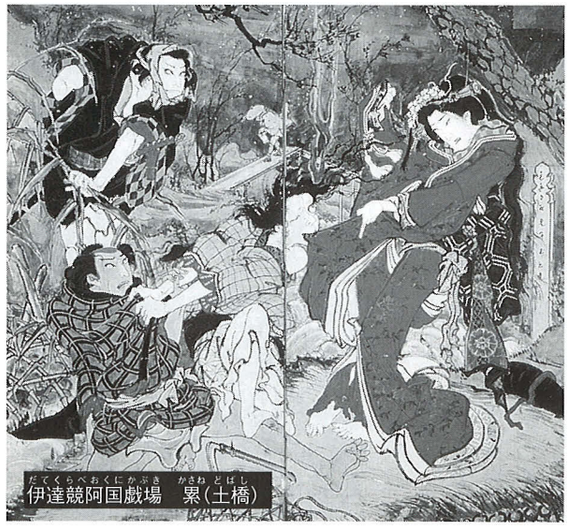
絵金の芝居絵屏風の画面構成は、優れた空間処理がなされ奥行きに広がりがあり、その画面に違う場面を組み合わせる異時同図法を用いることによって更に重層的な空間を作り上げています。一説には工房的な制作も行われていたといい、数多くの弟子を抱えていたと伝えられる絵金ですが、しかし、絵金独自の芝居絵屏風の空間構成が他の芝居絵屏風を手がけた絵師たちに引き継がれることが少なかったことは残念に思います。

この「絵金」の展覧会を開催するにあたって、高知県立美術館が展覧会を行うのだからホンモノの絵金を展示するんでしょうね、と聞かれたこともあります。「ホンモノ」「ニセモノ」とは違ったところで展覧会の準備を進めておりましたので、さてどうしたものかと戸惑いを覚えたことでした。もちろん、絵金とその他の絵師を一緒にしようということではありません。絵金は絵金ですぐれた技量の絵師として評価してゆくことが必要ですし、先人たちの業績によりその評価はゆるぎないものとなっています。しかし、絵金の芝居絵だけで土佐の芝居絵が終わってしまったのだとしたら、絵金は本当に異端の絵師ということになります。大画面の屏風をはじめとする土佐の芝居絵を数多くの人々が支持し、また、複数の絵師たちが芝居絵を描いたことも重要なことではないでしょうか。

（高知県立美術館学芸員）

二月堂良弁杉の由来

浮世柄比翼稲妻　鈴ケ森


伊達競阿国戯場　累（土橋）

散るが花という

堀内豊

このあいだうちから風邪気味で、ヒマつぶしに本棚から手当たりしだいに本をとりだして、乱読する。

そのうち井伏鱒二の『文士の風貌』を読みたくて、また書斎に入った。

『文士の風貌』に「田中さんのこと」という随筆がある。井伏鱒二が若いころから親炙してきた田中貢太郎（高知市仁井田出身）のことを書いている。その冒頭に、

「数年前、大型の段ボール箱を一つ、佐々木味津三の未亡人から届けてきた。中味は『旋風時代』の作者田中貢太郎の日記、句稿集、小説の腹案控帳、満韓・中国・日本各地の旅行日記、文芸手帳、手記などである。（後略）」と書き、そのあとは田中貢太郎の日記を抜記して、感想をのべている。

私は、読んでいるうち、昭和十五（一九四〇）年四月十八日の箇所にいき当たって、ハッと思った。その日のことを田中貢太郎は、こう記している。

「十八日

高知新聞の朝刊に経国文芸の会の講演の広告があって、それには大木惇夫・榊山潤・松沢太平・斉藤瀏の諸氏が講演するとあった。（後略）」

そのあとの田中貢太郎の行跡を、井伏鱒二は次のように補記している。

「二十一日には、講演をすませた榊山君に逢ひに高知新聞へ行き、講師の一行を駅まで見送って、幡磨屋町からバスで種崎に帰ったと書いてある」

ところで先ほど私は、ハッと思った、と書いたのは、実は私はこのときの講演会の聴衆のひとりであったからである。

はるか遠い日のことだから、時日をはっきり覚えていなかったが、はからずも田中貢太郎の日記によってその日のことを憶いだした。そうだ。あれは昭和十五年四月二十一日の午後一時からのことだった。

城東中学校講堂（現在の追手前高校）で、国民精神総動員文芸大会の講演があった。まっさきに登壇したのは榊山潤だった。彼はそのころ「新潮」に、福島二本松藩に材をとった歴史小説を発表したばかりだったので、演題は「歴史について」であった。（榊山はこの歴史小説によって昭和十五年度新潮社文芸賞を受賞す）

つづいて大木惇夫は「詩の領域」と題して講演し、最後に、元陸軍少将で二・二六事件で叛乱幇助罪で下獄した、異色の歌人斉藤瀏が「現実の認識と文化生活」を講演し、たしか午後四時すぎに閉会したとおもう。

以上が、私の記憶のエクランに映しだされた昭和十五年のなつかしい一齣である。

さて、これから私がとりあげるのは、講師としてはじめて風姿に接した詩人、大木惇夫のことである。

ある資料によると、大木惇夫は前記の講演会で来高した翌年（昭和十六年）の秋ごろ、すなわち太平洋戦争が勃発する直前に、文学者の徴用（白紙召集）で阿部知二・大宅壮一・北原武夫・大江賢次・武田麟太郎・浅野晃・富沢有為男・寒川光太郎たちと、ジャワ作戦軍宣伝班員として従軍した。

大木が、このときの体験をまとめて刊行した詩集が『海原にありて歌える』である。「南支那海の船上にて」の前書きの「戦友別盃の歌」は、多くの人々から愛誦された。全文を引用する。

言うなかれ、君よ、わかれを、／世の常を、また生き死にを、／海ばらのはるけき果てに／今や、はた何をか言わん、／熱き血を捧ぐる者の／大いなる胸を叩けよ、／満月を盃にくだきて／暫し、ただ酔いて勢えよ、／わが征くはバタビヤの街、／君はよくバンドンを突け、／この夕べ相離るとも／かがやかし南十字を／いつの夜か、また共に見ん、／言うなかれ、君よ、わかれを、／見よ、空と水うつところ／黙々と雲は行き雲はゆけるを。

「その頃、大木惇夫の「海原にありて歌える」という詩集を愛唱した。なかでも「戦友別盃の歌」などはみんな暗記していた」

これは、山口瞳の「江分利満氏の優雅な生活」の一節である。この文章になぞらえると、私も愛唱し、暗記していたひとりであった。もっとも私は、昭和十六（一九四一）年に徴兵検査を受けて乙種合格であったから、「海原にありて歌える」が刊行した頃は、赤紙（召集令状）が今日くるか明日くるかと、思わない日はなかった。戦地へ征けば、死が待ち受けている。わが国が危急存亡の秋にあるから、死地から逃避することはできない。しかし、（徒花のように散ってたまるか……）と、ときどき胸のなかで反芻した。

さて話をもとに戻すと、講演会で大木惇夫が「詩の領域」で講述した内容は、アカデミズムがちらついて、私は違和感があった。それに、彼の詩になじめなかった。

もともと大木惇夫の詩は、伝統ふうの抒情を基調に、文語脈の表現形式をとってきたから、私の詩観にはそぐわなかった。

ところが、である。大木惇夫は長年にわたって駆使してきた文語脈の詩法を、『海原にありて歌える』にも用いたから、それがみごとに功を奏して、たちまち時の詩人になった。

このことを考えると、戦争の異常さ、つまり熱気と狂気をはらんで、個人の運命をねじまげる非日常性のなかで、詩的表現をとるばあい、読む側の聴覚と情調をそそる、快い昂揚のリズムがもっともふさわしいようだ。

そのかぎりにおいては、大木惇夫の熟練の文語脈の詩風が意にかなっていた。詩集「海原にありて歌える」。とくに「戦友別盃の歌」が多くの人に愛唱されたゆえんであろう。

さて、私が大木惇夫の詩精神を根底から信じられなくなったことを、これから順序を追って書いてみよう。

――昭和十九（一九四四）年十月十九日。大西滝治郎中将（第一航空艦隊司令長官）の指揮で、神風特別攻撃隊が編成された。零戦に二五〇キロの爆弾を積んで、アメリカ艦隊に突入するのが目的であった。

十月二十五日。特攻隊がはじめて出撃した。いらい来る日ごとに若者たちが、次からつぎに基地を発進して、敵艦隊に迫り（海ゆかば水漬く屍）になった。

ちょうどその頃であった。

大木惇夫が朝日新聞に発表した随想は、二十そこそこの特別攻撃隊の士気を鼓舞する文章であった。そのなかに次の言葉があったのをいまでもおぼえている。

咲くが花にあらず
散るが花というなり。

大木惇夫の美意識は、若者の死を賛美することであったのか、と、実ににがにがしい思いをしたものだ。で、私はすぐに朝日新聞の購読さえことわることにした。それほど名状しがたい憤りを感じた。

ところで、聞くところによると、特別攻撃隊が出撃するときは、かならず上官が大盃に酒を注いで、若い隊士を出撃させたというが、大木惇夫が「満月を盃にくだきて　暫し、ただ酔いて勢えよ、」と歌ったように、若い特攻隊員も「酔いて勢え」と出撃させられた光景をおもうと、まことに哀しくなる。

このことを、大木惇夫は知ってか知らずか、〝散るが花というなり〟と言いきったことを、私はどうしても許容できなかった。

あれから五十余年たった今でも、その気持ちは変わらない。

（高知県地方職業安定審議会委員）

お稲荷様界隈 2

久武　盛真

夜更けて急襲した台風の翌朝、径八〇　のサイカチがお稲荷さんの社殿へ倒れ込みました。木樵が始末した株にすぐ芽が出て薮になりました。サイカチは中国原産の豆科の木で、慌てて太り過ぎたのか根が脆かったのでしょう。樹皮が利尿剤とかで手が届きだした枝を遠方からも切りに来ました。欲しい人はお供え物をしてご祈祷を頼みます。この時父は二足の鞋で商売繁盛で上機嫌。我が家は大層サイカチのお蔭を被りました。

野生動物は予知能力が発達している筈ですのに、余りにも突然の台風の来襲で、油断した雀が雨水に流されて竪樋にぎっしり詰まっていました。十年に一度の現象とかで焼き鳥を昼も晩もボリボリ食べました。

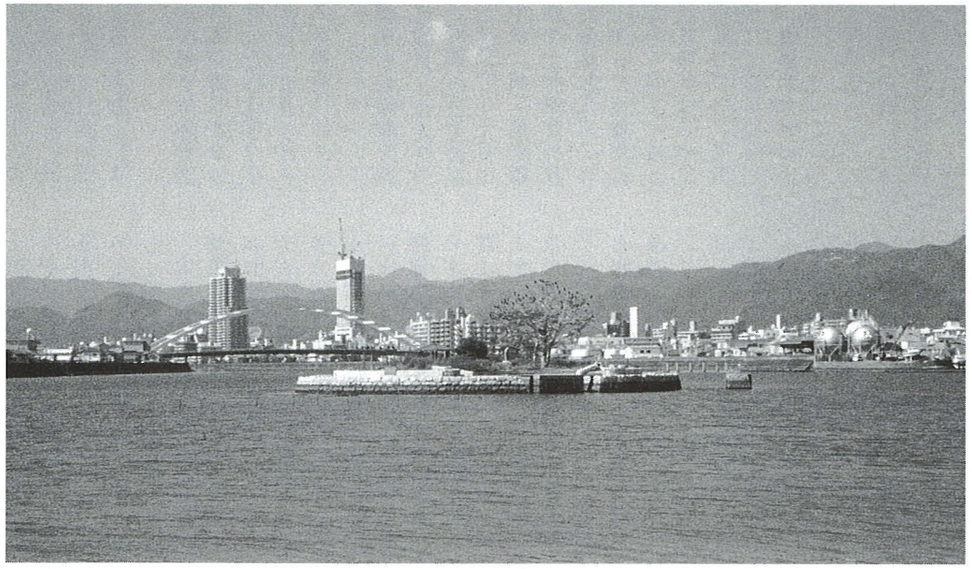
昼過ぎに後年競輪競馬新聞を創立した鹿三郎と、散髪屋になった熊喜が「伝馬を拾うたぞ丸山台へ行かんか」と、誘いに来ました。

丸山台は昔料亭のあった堀川の河口の小島です。自由民権の史跡ですが今では門田豊さんのご尽力で小公園風に整備されました。

お宮の前の雁木には櫂のない伝馬がもやってありました。行きはヨイヨイですが、川に漂う板切れを拾って懸命に漕いでも子供三人には無理な引き潮で丸山台からはとても戻れません。雨は降るしひもじいし泣きたくなって行き着いた所で伝馬をもやって戻る道々、自分が舟主の積もりの熊喜はしきりに「伝馬が勿体無いねや」と繰り返しました。

サイカチ（まめ科）

伝馬の櫂で思い出すのは、宮尾登美子さんの小説『櫂』です。文中に緑町三丁目とか緑町の裏町と書いてありますが、私は緑町に三丁目があったとは初耳でした。大正期の緑町は一部分がスラムで、倒産したスコップ工場と、下川藺莚染色工場の跡がありました。



公園風に整備された丸山台

緑町は新地へ徒歩三分の少し崩れた雰囲気の街です。風俗産業関連の女衒さんのお邸もあったようです。頸だけお白粉を塗りたくった湯上がりの年増女が仕立て屋の店先で居汚く話しこんでいたり、真昼の稲荷湯で全身倶利伽羅紋々の角刈り頭のお兄さんが浴槽の湯を口に含んでは、ガラガラぷうと吐き出していたのが印象に残っています。

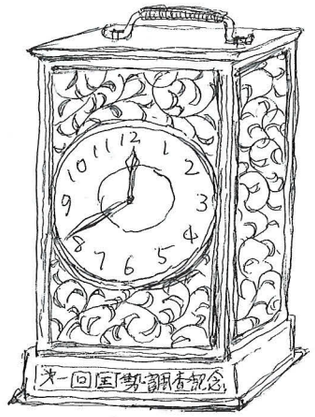
第一回国勢調査は大正九年十月一日で、現職の校長も調査員に加えられ、記念にオルゴール付きの目覚まし時計を貰いました。

お日が出るよに
ずんずんのぼる。
のぼるお国の民のさま
調べだしましょ国勢調査
町も田舎も村浜も

と、書いた歌詞が時計の底蓋に貼ってありました。父の留守に鹿三郎と熊喜がきて三人で面白がっていたら音の出る櫛のような部品が一本折れました。破片を折れ口へ当てた位で直る筈はありません。四、五日は父がネジを巻くのが気がかりでした。兄の雄吉が真っ先に気付きました。容疑は真っ直に私にきました。白ばくれても駄目です。壊した事よりも不正直を責められました。だが私がジョージ・ワシントン流に自白しても結局同じでしょう。大人の言う事なす事におよその察しはついていました。

音痴の時計は時間の観念を失ってからも、空襲までは我が家にありました。

当時三十七歳の校長先生に私は一度弁当を運びました。あの弁当は出がけに忘れたのか、作り手が寝過ぎたのか、自分で持って行かなかった訳は永遠の謎です。学校へは田んぼの中の市営住宅を抜けると近道です。市営住宅の高橋の産婆さんの前でつまづいて、中身の玉子焼きが飛び出して、泣いて戻ると継子のように母に叱られました。一家にとって貴重な卵を駄目にしたから、母のご立腹はご尤もですが、きちんと結びもせずに怒っても「六日の菖蒲十日の菊」です。この一件で最大の被害者は昼飯抜きの父でした。



第１回国勢調査記念の目覚まし時計

訓導よりは高天原は多少インチキ臭いけれど元手要らずの結構な商売ですのに、父は大勢の家族に頼られて二兎を追った末に病気を得て時々学校を休みました。

役場の斎藤助役が半白の乃木髭をしごいて訪れた日に、父は寝るにも飽いてヴァイオリンを爪弾いたりレコードを掛けたりしていました。当時蓄音機はまだ珍しくて、斎藤さんの求めで父が「何とか何とかでオンダブリンベイ」と女が歌う盤を掛けると、「ほほう。横文字じゃねえ」と如何にも感にたえた様子で耳を傾けました。次の「乃木大将の揮」という浪速節を「チコンキはなかなか面白いねえ」と上機嫌で聞きました。

斎藤さんの用件は単なる見舞いではなかったのです。青い顔で生徒の前でコンコン咳をされては立場上困る事を仄めかしにきたのです。世の中は何事も命あっての物種です。何よりも丈夫で長持ちをしなければ世渡りはできません。父は恩給がつくまでねばって大正十一年三月一杯で勇退しました。

卯月四月は晴れて私の入学式です。父は一丁羅のフロックコートで登壇して、「犬と雉と猿は桃太郎さんの言う事を聞いて黍団子を貰いました。皆さんも学校で先生のお話を良く聞いて黍団子を半分。お家でも両親の言う事を聞いてお手伝いもして黍団子を半分貰いなさい」と、両手の親指と人さし指を左右から寄せてきて丸を一つ作りました。

新入生をつかまえて分数を教えたこの世紀の一席を他の先生も来賓も神妙に聞いていました。犬も雉も猿も約束をするだけで、何も働かずにご褒美が貰えます。私も約束だけでご褒美が貰えたら得だなと思いました。

父の後任は曽我佐之助先生が着任するまで一年半も恒石教頭先生が代行しました。裾長の海老茶袴の私達の受け持ちの黒岩先生は、秦泉寺から来る問題児の八木君に、嫁入り前の前歯を折られてしまいました。当時は校内暴力という言葉はまだありませんでした。何故八木君が校区外から通学したのか、その事情を多分父は知っていたでしょう。

（泉文芸　主宰）

県内考古事情

土佐考古通信（1）

山本　哲也

先頃、高知県立歴史民俗資料館において全国特別巡回展「新発見考古速報展」が開催され、同時に地域展「土佐を掘る」で最近の県内出土考古資料等が展示公開された。一九日間の短期開催期間ではあったが、延べ七、三五〇人余の入館者数に加えて、これまでの最多入館者数を更新した日があるなど極めて盛況であったとうかがっている。

県内資料においても、野市町兎田八幡宮の弥生絵画銅剣・西土佐村大宮宮崎遺跡の縄文線刻礫・南国市岡豊町小蓮奥谷南遺跡の旧石器資料など、全国的に注目された遺物が公開され、新発見資料の豊富さに興味を持たれた方も多いことかと考える。

従来、本県は文化の後進地域とされ、県外に比べてさほどの考古資料も出土しないのではないかと、みなされてきた。けれども現在、蓄積されつつある考古資料等は、一見華麗さはないものの地域の実像を如実に物語る資料ばかりであり、あらためて歴史の多彩さ複雑さに驚かされるのである。

確かに地域では、壮大な前方後円墳等の遺跡や目を見はる出土文化財などの存在は乏しいかもしれない。しかしその存在の希薄さのなかにこそ、歴史の実体が隠されているのであり、身近な地域の資料を丹念にひもとくことが、歴史像全体の解明には特に重要であると考える。

そこで、最近の県内出土考古資料・調査遺跡等のなかから、地域の特色に関連した資料を題材に紹介することとし、今回は土佐国分寺跡から出土の「海獣葡萄鏡」（かいじゅうぶどうきょう）について触れることにしたい。

土佐国分寺跡は奈良時代創建の国分僧寺跡で、南国市国分に所在し国の史跡に指定されている。同寺院跡は、五〇〇尺四方の寺域をもつ東大寺式の伽藍配置で、金堂跡は現金堂の真下に埋もれていることなどがこれまでの調査で判明している。九三年の調査で、現金堂北西の調査区から「海獣葡萄鏡」が出土した。

鏡は河原石による集石遺構の中に埋設された常滑焼大甕の底から発見され、鎌倉時代後期から室町時代初頭にかけての経塚遺構に関連した遺物とみられる。なお、この集石遺構は同時代の建物基壇跡の北端部に形成されており、律令期の国分寺廃絶後に存在していた中世の堂・社に伴う遺構であると考えられる。

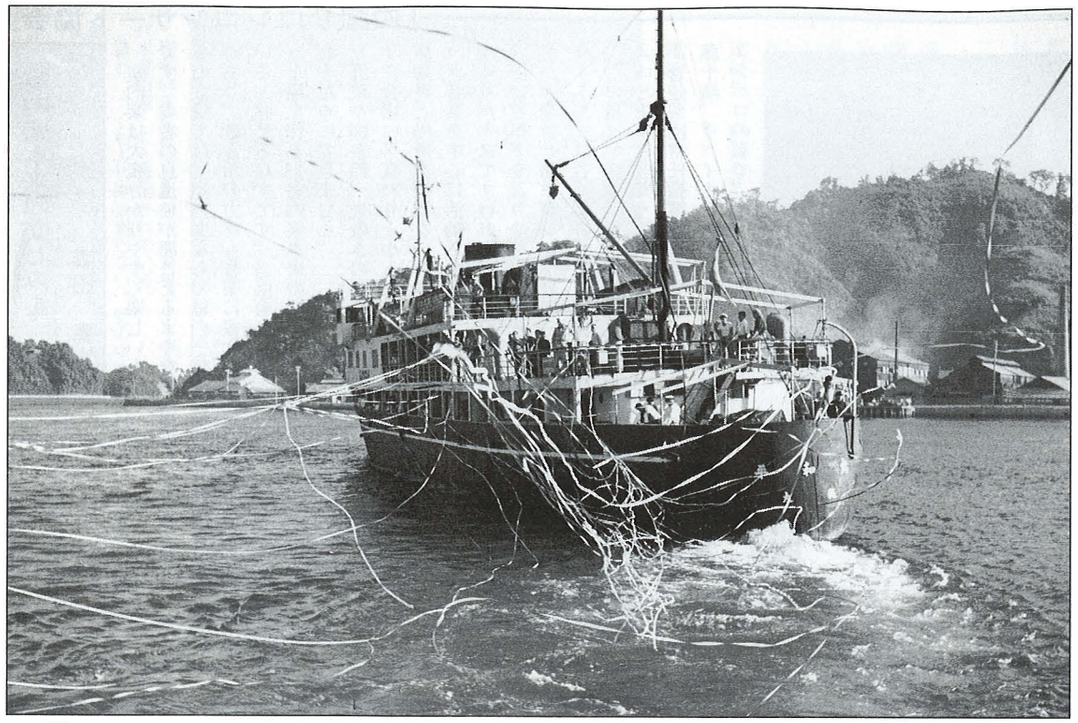
中世の奉納・埋設鏡等の多くは藤原期以降製作の和鏡（日本製の鏡）が主体であるが、この鏡は唐鏡を模倣した国産鏡で奈良時代前半（8C前半）に製作されたものである。

海獣葡萄鏡は、唐代に盛行した鏡で、わが国では古墳・寺院跡・祭祀遺跡などからの出土例や、正倉院・法隆寺等の古社寺の伝世品が知られている。高松塚古墳からの出土品や法隆寺五重塔心礎内から発見された鏡は特に有名である。これらの舶載鏡は白銅質で鋳上がりも良好であるが、これに比べて土佐国分寺跡出土鏡は、銅分が多く鋳上がりは良くない。模様も不鮮明など中国境とは相違している。

ところで、土佐国分寺跡出土例との同型・同笵鏡が知られている。奈良県五条市西久留野墓の段出土鏡、愛知県幡豆郡幡豆町西幡豆・後田遺跡出土鏡、新潟県上越市子安遺跡出土鏡でいずれも面径一三・六cm前後の小型鏡である。この鏡類は唐式鏡を原型とした再笵鋳造鏡であり、奈良時代の製作鏡である。

土佐国分寺跡出土鏡は、中世の鏡ではなく国内四例目の古代の同笵海獣葡萄鏡であることに意義がある。律令期に地方へ製作配布された国分寺所蔵鏡が伝世され、中世の祭祀遺構に再埋納されたことがうかがわれる。

（高知県埋蔵文化財センター）



第12回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

昭和25年頃の阪神航路　川島　正敬

人生模様

風俗歳時記

風が冷たくなったウィークデーの午後、銀座は意外なほど閑散としていた。といっても銀座にしては、という程度の閑散なのだが。

七丁目のビアホール『ライオン』は戦前からの古い建物だ。煤けた高い天井の木組みは重厚だし、内壁の煉瓦も時代のかゝった色調で人を落ち着かせる。

一階の平土間は仕切り無しで、木製四人掛けのテーブルが一面に並べられている。満席の状態だと、ホール全体がうなり声をあげるような一種独特の音に満ちている。それはビールという酒を介した華やぎとでもいう雰囲気のものだ。だが、昼下がりの今は席も七、八分の入りで静かな一時が過ぎてゆく。

お気に入りの黒ビールの大ジョッキと一皿のチーズを前にゆったりと座る。右隣には若いカップル、時々笑顔でひっそりと話を交わす。理知的だが少し固い女性の表情が、二杯目のジョッキを空けるころからがらりと可憐な色っぽさをにじませ始める。女性とは化けるものなりだ。

お向いは四人の若者、先輩社員に三人の新人が種々教わっている話だ。

左手には初老の男性が一人、半分減ったジョッキと閉じたまゝの文庫本を前に凝然と身じろぎもしない。背後はイスラム文化を延々と論じる髭の老人と、聞き入る中年女性。

七十歳台の男性三人連れが入って来た。ラフな服装でつい近所からだと判る。崩してはいてもどことなく枠な感じは、店を二世達に譲った銀座の老舗の旦那衆だろうか。

三人のもとに運ばれたジョッキが四つ、一つは黒ビールだ。各々が自分のジョッキに黒ビールを注ぎ足しながら飲む。まるで、この半世紀の間俺達は毎日こうして来たのだ、とでもいうように寛（くつろ）いだ時間が流れる。

それぞれが肩の触れ合う距離で、しかし決して交錯することの無い人生模様を古いシャンデリアが見下ろしている。こんな空間が高知にはどうしてできないのかと、ちょっぴり淋しい思いで座っている私を含めて。

（茂）

「四国サロンコンサート協会」

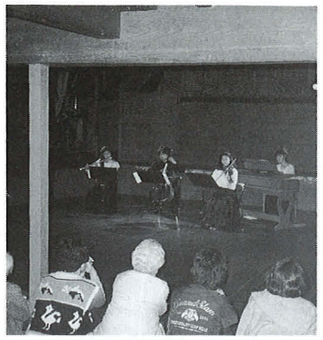
室内楽本来の楽しみを

森田　真実

室内楽は大変分かりやすく楽しいものです。奏者の息遣いが聞こえるような小さな会場では、室内楽ならではの一体感があり、聴き手の方々も音楽に参加していると感じるはずです。当協会はこのような場を作り、室内楽本来の楽しみを味わうためにできました。

酒蔵や図書館、畳敷きの喫茶店がコンサー会場に早変わり！小人数ならではの機動性と場所を選ばない編成（主にバロック音楽を中心に活動）の便利さで、ゆっくりペースですけれど、五年間で三十ヵ所ほど県下を巡りました。語りがあり、また演奏者と聴衆がワンフロアでのコンサート形式は各地で好評！

この秋は、音楽監督の豊嶋和史氏（チェロと語りを担当・四国フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者）とフルートの安藤千織、ヴァイオリンの伊藤奈由美、チェンバロの私で、十一月六日夜須町、七



馬路村、十二日高知県立美術館ホールで演奏会をいたします。皆さん、是非お越しください。

また、来年の一月には土佐清水での公演を企画中です。もともと音楽の草の根運動として始まった活動ですから、今後も、いろんな所におじゃまして一人でも多くの方々と憩える音楽空間を共有したいと思っています。そして音楽の成し得るいろんな可能性を模索していきたい。

連絡先　高知市比島町四－七－三二　森田真実　電話〇八八八－七五－五六一八（北村）

第13回市民フロア企画展

小嶋博子展

―組・スプラング　そして紙―

会期：11月28日㈭～12月10日㈫
10：00 AM ～ 6：00 PM

場所：市民フロア
（デンテツターミナルビル５階）

主催：㈶高知市文化振興事業団
☎0888-73-4365

後援：高知新聞・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・NHK高知放送局・エフエム高知・高知県美術家協会

高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動日録

土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り　496頁
定価 10,000 円（税込み）

「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明　著
Ａ５判・上製本・288頁　定価2,000円（本体1,942円）

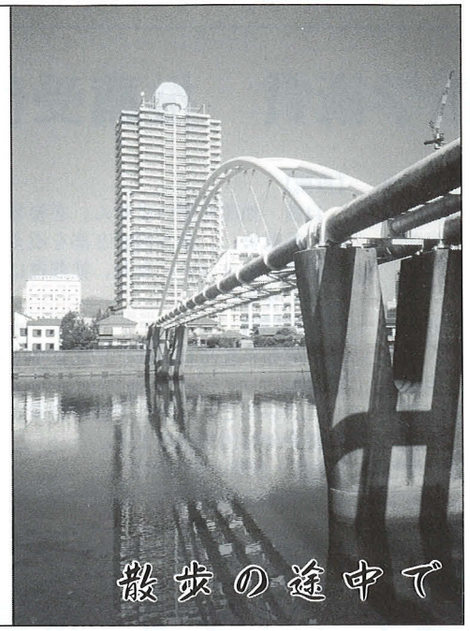
■ 新　刊 ■

清流を子らへ

――21世紀に残したい鏡川――

高知河川環境研究会編　A5判・並製本122頁・定価1,030円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。



昭和54年に完成した鏡川水道橋。土木学会の「田中賞」を受賞、日本の「近代水道百選」にも選定されている。

橋といっても人や車は通らない。管の中を水が流れる。それが下を流れる鏡川に映る。北向かいの高層ビルともそれなりに調和していて、つい立ち止まって見てしまう。

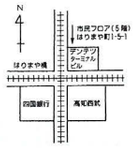
10年、20年経って周辺の環境に溶け込めるデザインが本物といえるのだろう。

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地　高知市はりまや町一－五－一　デンテツターミナルビル５Ｆ



お申し込み
㈶高知市文化振興事業団
☎73－4365

好評につき二刷発売中！

土佐弁　土佐日記

土居重俊監修　Ｂ６判・130頁・上製本
高知市文化振興事業団 編　定価 1,300円

紀貫之の名著『土佐日記』を、とさことばでつづるとどうなるか？古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

好評につき二刷発売中！

高知の森林

高知県緑の環境会議　森林研究会　編
Ｂ５変型・228頁　定価 2,500円

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、まだ残されている貴重な自然や植生のほか、森林と人々とのかかわりの歴史や、現地への道のり等も紹介。

風伯

絵金余録

「高知に来たのは二十六年ぶり。中平康監督（高知出身）の映画『闇の中の魑魅魍魎』のロケだった。絵金の扮装で赤岡の町を歩いていたら『絵金さん』なんて呼ばれてね。」（来高の磨赤児に聞く」高知新聞九月三日夕刊）

この記事を読んでいて、八波直則著『私の慕南歌』に紹介されている同映画誕生をめぐる裏話を思い出した。

日活映画『狂った果実』でスーパースター石原裕次郎を生み出した中平監督は、旧制高知高校出身。かつて同校映研のメンバーであった教え子を触発して、『闇の中の……』を撮らせたのが、映研部長であった八波さん（同映画製作当時は高知大学教授、平成三年逝去）であった。

四十五年の春、彼が帰高したときに絵金の画集（未来社刊）と本物の作品数点を見せましたら、翌朝、目を真っ赤にして飛んで来た。

「絶対にボクがやる。絵金を映画化することはボクの宿命みたいなものだ。昨夜は画集を見ながら一睡もできませんでした！」（上掲書150ページ）

原作は、榎本滋民の『血みどろ絵金』。脚色は、中平の師匠新藤兼人。撮影の仕方も、スタッフ全員が現地に民泊してロケだけで仕上げるという新藤方式。ロケの中心となった絵金の家は、絵金研究家近森敏夫氏が自宅を提供し、赤岡町に残る白壁の土蔵などを片っ端から撮影に利用したという。

（仁）

第７回　高知出版学術賞　推薦受付

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版物を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

②1996年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書２部を添え、審査委員会まで提出して下さい。なお、推薦書は請求下さればお送りします。

【受付期間】

平成８年12月10日㈫～平成９年１月31日㈮

【表彰】

３点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

【推薦・お問い合わせ】

文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会

第13回　高知市都市美デザイン賞　推薦募集

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・公園・モニュメントなどを推薦してください。

【対象】高知市内にあって平成８年１月１日から平成８年12月31日までに完工した建築物・建造物

【推薦締切】平成９年１月31日㈮
（郵送の場合当日の消印有効）

【推薦】

どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき１通に１件とします。

① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
② 推薦の理由
③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

【送り先・問い合わせ先】

高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

第13回　写真コンテスト・高知を撮る　作品募集

【テーマ】高知を撮る

＊高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

【応　募】

＊どなたでも、一人何点でも応募できます。

＊254㎜×365㎜（ワイド四ツ切）以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。

＊組写真は３枚までで、組写真であることを明記してください。

＊その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

【応募締切】平成９年１月31日㈮

【賞】　特選　２点（賞状と賞金５万円、副賞）
　　準特選　15点（賞状と賞金１万円、副賞）
　　入選　70点以内

【作品展】

平成９年３月市民フロアにて開催予定

【応募先】

＊㈶高知市文化振興事業団

＊高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店

財団法人　高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町５丁目２番３号　TEL(0888)73-4365
郵便振替01680-5-14869